

## 児童健全育成賞 佳作

# 中学生Aちゃんとの居場所づくり －出張児童館マチデコ\*キッズの挑戦－

北海道旭川市

神楽児童センター 館長 青塚 美幸

## 1. はじめに

旭川市は人口約32万人の中核市で、小学校数53校、うち42小学校には放課後児童クラブ82か所が設置されている。それとは別に、自由来館を対象とした単体の児童センター6館が設置されているが、未設置地域が多く、児童クラブ等に比べ子どもの施設としての認知度は高くない。

平成27年4月からは、労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団を母体としたワーカーズコープ指定管理者グループ（以下、当法人）が市内6館の指定管理者となり、筆者も旭川市の嘱託職員（児童館）から当法人に所属を移し、3館の館長と、そのうち1館の児童厚生員を兼務している。

当法人の子育ち事業の指針では、すべての子どもの命と人権が大切にされる協同のまちづくりが掲げられており、新たに館長職に就いた私は、子どもの「困った」をどうキャッチし、児童館としてどう向き合うのか、地域の一員である子どもたちとの協同のまちづくり、福祉づくりとは何かを中心に据え、模索していくこととなる。

本報告は、「福祉的機能を有する児童福祉施設」である児童館の職員である児童厚生員が、子どもの困難を目の当たりにして無力さに苛まれながらも、子どもたちとの関係を育み、児童館未設置地区に引っ越しをした中学生との出張児童館をとおして、居場所づくり、地域づくり

にチャレンジした実践報告である。

## 2. 児童館でみてきた子どもの困難

児童館勤務が30年近い私は、市内の児童館を異動しながら、これまで様々な子どもたちに出会ってきた。特に印象的だったネグレクトの養育環境にあった小学校低学年きょうだいの事例と、その後について触れる。

幼少時より、オムツのみを着用し、裸姿で屋外に出て遊ぶ姿が目撃される等、ネグレクトの養育環境で育つ。就学に伴い児童館に出入りするようになるが、欠食、着衣汚損、汚臭が目立ち、「昨日の給食時から何も食べていない」ことが頻繁にあった。下校途中、民家の畑でトマトやきゅうりを無断で取り、きょうだいで分け合って食べたという本人からの話や、児童厚生員が出勤すると、本児が学校へ行かずに児童館玄関前の草原で力なく大の字で寝そべっており、職員が昼食のお弁当を食べさせたことも1度や2度ではなかった。また、特に夏場は衣服から強烈な匂いを放ち、周りの児童のはやし立てに職員が耐え切れず、流し場で本児のTシャツを洗って着せたこともあった。当然、行政の福祉機関や相談機関も動いていたが、家族が支援サービスを拒否しているという話を伝え聞く。学年が上がるに従い、同じ学校の児童が出入りする児童館からは徐々に足が遠のいてしまっていた。数年後、きょうだいが通っていた児童館とは別の館からの報告で、欠食が目立つ児童に

ついて相談を受けた私は、その館を訪れそつと児童のもとに近づくと、覚えのある匂いが私の鼻をつき、不思議な感覚を覚えた。児童の名字は数年前に出会っていたきょうだいと同じだったということがわかった。そして、このきょうだいは、10代後半になっていてもなお、未だ同じような生活環境にいたることがわかった。30年近い間に私は、類似した事例やより過酷な事例も知ることとなった。

### 3. 唯一無二の存在、児童館

これらの事例を知ることができたのは、0歳児から18歳までの長い期間に渡って支援が可能な、唯一無二である児童館だからこそ、かすかなルートででも情報が繋がったものと考えている。

これらの事例に共通しているのは、地域社会との断絶である。親が地域との繋がりを拒否すると、当然ながら、子どもも地域との繋がりを失うこととなる。これまでも、保護者自身の、地域や社会に対する無関心や、時に敵意ともいえる眼差しを感じる度、保護者自身が幼少期からこれまで、他者を頼ったり、地域を信頼したりする経験をしてこなかったのではないかとと思われることが多々あった。また、福祉的課題がある子の多くが抱える不登校傾向により、唯一社会との接点であった学校との繋がりが薄くなったまま、引きこもり状態となる子も多い。不登校になると、ほとんどの子が児童館からも足が離れてしまう。

子どもが社会と、児童館と繋がっている時期に「児童館はあなたの絶対的な味方である」ことを全身に染み込ませること、さらに、保護者に対しても、「児童館はあなた方親と同じように子どもを想い、子育ての苦勞を分かち合う存在である」ことを伝える必要性を強く感じている。

### 4. Aちゃんとの出会い

平成27年度以降、毎月開かれる児童センター6館の合同職員会議では、利用者の様子や、

利用児への支援方法を報告し合い、対応が難しいケースの事例検討などを行っている。そのうちのA児童センターからの報告は、毎回、小学6年生Aちゃんについてであった。

Aちゃんは、学校が休みの日には、児童館近くにある自宅の窓から職員が出勤してくるのを待ち構え、必ず児童厚生員がAちゃんに何らかのリアクションをすることを求めた。9時の開館と同時に来館、まず受付の鉛筆を折り、それを持って壁に穴を開け、その後はコロナ感染防止用の消毒剤や液体ソープを館内にまき散らし、さらにパズルやカードゲームの部品を隠す、破く、時には隣町まで捨てに行き、それを職員に得意げに報告する等、イタズラにしては度を過ぎた行動が繰り返されていた。

彼女が館内で「遊ぶ」ことは皆無で、児童厚生員には、体当たりや痣ができるほどつねるなど、常に攻撃的な行為があり、職員が他の利用者への対応で、ひと時でもAちゃんに目を向けていないと、ますます乱暴は激しくなった。その利用者が小さな子どもであろうと、おとなであろうと、彼らへ向けて大声で悪態をつくなどして職員との接触を阻止し、常に自分への注目を求めた。

午前中にひとしきり騒ぐと、昼時間は自分の弟妹に昼食を食べさせるため急いで帰宅し、すぐさま戻ってくる。その後、閉館時刻まで1日中それが繰り返された。

また、Aちゃんは、職員が自分のことをどう思っているか、自分のいないところで自分を悪く言っているのではないかと、レコーダー機能を起動させたスマホをこっそり職員室に忍ばせ、職員の会話を録音する等、繊細で悲痛なほどに、職員の絶対的な愛情を求めた。さらに、Aちゃんの弟妹も同時に来館すると、児童厚生員2人体制の職員のうち、ひとりがAちゃんの相手を、もう1人の職員が小学生の弟妹をおんぶしながら、他の数十名の利用児の対応をしなければならず、まさに壮絶な日々が続いていた。当時、この館に出入りしAちゃんを目の当たりにした職員からは、彼女の行動に対し「どうし

たらよいのか」という非難に近い声が私に寄せられた。だが、中心になってAちゃんに関わっていたT児童厚生員は、同じ思いを持つ他の児童厚生員と共に、来る日も来る日もAちゃんの行動を全身で受け止めていた。

Aちゃんの、利用当初からおとな（児童厚生員）の様子をつぶさに観察し、荒々しくも身体的接触を求め「自分を受け止めてくれるかもしれない」という微かな期待と、「どうせおとななんて」という諦めに似た思いとの揺らぎをいち早くキャッチした児童厚生員。Aちゃんの育ちには、「信頼できるおとながいる」ことが必要で、それを証明するんだという揺るぎない信念を、まさに体現していた。T児童厚生員は、1年間で体重が11kgも痩せるという、体力の激しい消耗を伴いながらも、決して憔悴感を漂わせることなく、時には冗談で返し、時にはじゃれ合っただけのやり返しをしながら、根気強く言動の節々で、Aちゃんの微かな変化を逃さず褒め、自分たちがどんなに彼女に愛情をもっているかを伝えていく。

## 5. 「この子の育ちには児童館が必要」

そんなある日、Aちゃんの弟妹のひとりであるBに対する職員の指導がもとで、保護者より激しいクレームを受けてしまう。市役所へも入った苦情は「その職員を辞めさせてほしい」というもので、市の担当者から連絡を受けた私は、恐る恐る保護者に電話をかけた。保護者は、我が子が頭ごなしに叱られたことに納得しておらず、こちらとしては状況を説明し、保護者の言い分も受け止め、納得できる指導が出来なかったことを詫言した上で、今後も継続してサポートしたい旨を伝えるが、職員の退職を迫る姿勢は軟化せず、「もう児童センターには行かせない」との強い宣言により、話し合いは決裂してしまった。

一方、当事者Bは、本来は保護者や学校から禁止されている下校途中に児童館へ遊びに来ていた。Bは、一度帰宅すると児童館に遊びに行

けないことが分かっていたのだろう。それを察した児童厚生員らは、短い時間、彼をいつものように遊ばせ、こっそりと、歩いて彼の自宅へ送り届けていた。

翌日も、その翌日も、Bが学校帰りに児童センターへ寄っている報告を受けた私は、Bにとって児童館は、必要不可欠な場所であることを改めて確信。それを保護者にどう伝えるか悩みながら、再度Bのお宅へ電話をいれる。電話に出てもらえないことも覚悟していたのだが、保護者は一転、すんなりと職員が勤務を続けることを受け入れてくれた。そればかりか、「児童館にとってBは必要ですし、Bにとっても児童館が必要だと思うんです」との私の言葉に、「……そうですね」との返答。私は、信じられない思いでその言葉を聴き、何度も何度も頭の中でリピートさせた。おそらく保護者は、我が子が下校途中にこっそり児童館へ寄っていること、慕っている職員と過ごしていること、職員がBを自宅に送り届けていることを把握してくれていたのだろう。A、Bきょうだいの家庭と、我々児童館の想いが通じ始めた瞬間であった。

この出来事は、これまでマイナスなものとして捉えていなかったクレームが、子どもと児童館との関係性を家庭にも伝える機会ともなり、保護者の我が子を思う気持ちを我々職員が知る手がかりにもなる、という新たな視点を提供してくれた。

## 6. 「わたし、どうしたらいいのさ」 ～Aちゃん一家の転校

この出来事と前後して、ようやくAちゃんの言動が徐々に落ち着きを見せ、職員間にも、Aちゃんとの関係づくりに手ごたえが見え始める。その矢先、Aちゃん一家の引っ越しが決まる。市内ではあるが、転校先には児童館がない。Aちゃんは中学生になっていた。

この子に児童館がなくなってしまうたら、どうになってしまうのだろう。転校が決まったことを受け、Aちゃんへの対応に終わりが見えた

いう思いがあったものの、引っ越しが近づくにつれ、職員間からAちゃんの今後を心配する声が高まっていく。何より、一番不安でいたのは当のAちゃんであった。「(児童館がなかったら)わたし、どうすればいいのさ」という言葉を残し、とうとう引っ越しの日を迎えてしまう。

## 7. 出張児童館「マチデコ\*キッズ」

Aちゃんは転居後も定期的に児童館へ連絡をくれていた。そんな彼女の様子を聞き、慕っていた児童厚生員と、月に一度でも直接会える日を設けられないかと、出張児童館を提案。たまたまその地域に当法人で開設していた地域共生拠点を活用することとし、彼女と関わって来た職員を中心に、有志数名で実施することになった。

開設にあたっては、地元のAちゃんにもメンバーとして声掛けをした。それは、出張児童館とは名ばかりの、Aちゃんひとりのために開設した児童館だった。彼女は、慣れ親しんだ職員との再会を喜ぶ一方、直接的にはほぼ初対面の私のことは、注意深く観察しているのがよくわかった。翌月から月1回のペースで開催を重ね、私のことも受け入れ彼女なりの愛着を示してくれるようにはなったが、Aちゃんは他児がその場所に来るのを頑なに拒んだ。

私たちは、まずはAちゃんの想いを尊重し、こじんまりと彼女の居場所として開催しながら、「この場所を誰が来てもいい、本来の児童館のような場所にしていきたい」と、彼女に伝えるタイミングを見計らっていた。Aちゃんの弟妹をはじめ、この地域にもAちゃんのように児童館を必要としている子が必ずいること、そして、それを支える信頼できるおとながいることを知ってほしかった。そのためには、年下の子に対する面倒見の良さ、周りへ気遣いができる繊細さ、そして本来は人好きな性格を持つAちゃんの力が必要だ、ということ、折をみて伝えていった。Aちゃんは、他児が来ることについてはさておき、自分が主体となる児童館づくりにはかなりの意欲を見せた。

その出張児童館は、子ども主体の居場所づくり、まちづくりを目指し、マチをデコレーションする意味で、「マチデコ\*キッズ」(以下、マチデコ)と命名した。

しかし、マチデコを継続的に開こうと思えば、離れたところから通う我々とは別に、地元で信頼できるおとなが関わることがどうしても必要だった。地元の手がかりがほとんどない私たちが最初にアクセスしたのが、市が各地域に設置している「まちづくり推進協議会」であった。事務局に「出張児童館」をやりたい旨を申し出ると、こどもを対象とした事業を検討していた時期に重なり、思いがけず協議会の地域事業として開催できることとなった。

## 8. 校長先生との出会い

私たちは、協議委員会の席で、改めてマチデコの説明をする機会をもらい、緊張しながらも、既存児童館の説明や、子どもたちと一緒に居場所づくり、地域づくりをしたい、というプレゼンを行った。そこで委員名簿の中にAちゃんが所属する学校の校長先生の名前があることに気が付き、閉会後にご挨拶をさせていただく。これが校長先生との最初の出会いである。すると翌朝、開館直後の児童館に校長先生から突如電話があり、「中学校の生徒たちに、マチデコへの参画を呼びかけないか」との提案をいただく。校長先生が直々に連絡をくれるということにまず驚き、さらに、ほぼ初対面の我々を学校に招き入れ、生徒に接触させるという提案に、喜びよりも狼狽えたのを覚えている。

これまでの児童館と学校との関係は、決して連携が深いとは言えなかった。児童館が学校に連絡をするのは、事故やトラブル等のマイナス事案発生時が圧倒的に多い。学校側の配慮で、「児童館に迷惑をかけた」ことへの叱責や、「児童館には行かないように」という禁止令が出ることも少なくなかった。学校と児童館は顔の見えない関係となっており、私自身も、学校に対しての障壁感は否めず、学校と児童館との連携は、自身の最大の課題でもあった。

## 9. 居場所の福祉的機能

学校内に案内された我々は、放課後に生徒会や部活動の生徒へ直接マチデコの活動を案内してまわった。その後、校長室では、この学校にも関係機関と連携しながらサポートしている生徒がいること、子どもたちには学校の他にも居場所が必要で、そういった場所の福祉的な役割を機能させ、子どもたちを地域と一体で育てていく必要があることを、校長先生がお話しされた。私は、校長先生の居場所に対する理解と、それを言葉にしてくれたこと、ましてや、そこに福祉的機能がある、ということにまで言及したことに、鳥肌が立つほど感銘し、凝り固まっていた緊張が一気にほぐれた。そして、この校長先生なら大丈夫だ、と確信を持った。

## 10. 運命的な繋がり

「実は、うちの児童館に通っていた子がこちらに転校しており、ここで出張児童館をやることにしたんです」と意を決して申し出ると、学校側は、まさか転校してきたAちゃんと繋がっているおとながいるとは想像もしてなかったと驚き、この奇跡的な繋がり運命的なものを感じると仰ってくれた。無論、私たちも同じ気持ちであった。

私たちは、Aちゃんがこの学校に転校したことを喜び、学校もまた、Aちゃんと児童館との繋がりを尊重し、彼女がマチデコの運営に参画できるよう最大限の配慮をしてくれた。Aちゃんが学校や家庭で何かあった時には、学校の先生には言えないこともあるだろうと、当時、自分の教室には通っていなかったAちゃんとマチデコスタッフが学校内で話す時間と場所を設けてくれることもあった。校長先生は、私の学校に対するイメージを、いとも簡単に根底から覆した。

## 11. 児童館の役割

その他にも、私たちはこの地域での新たな繋がり求め、機会を見つけては地域の会合に出席

した。マチデコの説明を行なうと、特に子どもを持つ母親世代からは歓迎を受けた。それは一様に、「こんなイベントをやって欲しい」「お金を払っても子どもに色々な体験をさせたい親はたくさんいる」というものであった。

私たちは、これまでの児童館運営でも、遊びを軸にした魅力ある場をつくる努力をしてきた。だがそれは、子ども達と出会い、心を繋ぐためのきっかけ、手段であって目的ではない。児童館イコールイベント屋という固定イメージにモヤモヤとし、抵抗感があった。Aちゃんが求めていたのは決してイベントではない。自分があるががまま受け止めてくれる人であり、場である。事実、Aちゃんは、マチデコで開催したイベントには殆ど参加しなかった。

おとなと同じように、子どもたちにも、自分が居ていいのだと思える居場所が必要である。それは学校、家庭、友達間等、様々だが、何らかの理由によりそこに行けないとしても、地域に「第3の居場所」があれば、心救われる子がいるかもしれない。しかし、その理解は思うように進んでおらず、ましてや児童館を含めた子どもの居場所のない地域には、その概念がないようにすら感じられた。この、地域が求める子どもの居場所へのニーズと、我々が目指す居場所との齟齬を埋めるためにはどうしたらよいか。私たちは新たな課題に直面することになった。

## 12. 地域への呼びかけ

この頃には、マチデコの活動が少しずつ認知され始めていた。まちづくり協議会の中では「児童館部会」という実行委員が設置されたこともあり、我々は、地域に向けて居場所の意義を呼びかける決意を固める。

Aちゃんにも少しずつ変化が見え始めた。弟妹と共にマチデコに来るようになったAちゃんは、不器用な言葉ではあるが、マチデコ愛を示してくれるようになっていた。やはり、一番ここを必要としているのはAちゃんであり、Aちゃん自身が、直接地域に呼びかけるのが、一

番説得力があるのではないか。

一か八かではあったが、Aちゃんに「マチデコを続けていくために、Aちゃんの言葉でここがどんなところなのか、なぜ来ているのかを、地域のおとなの人に伝えてもらえないか」と提案をしてみると、思いがけず、いや、期待をはるかに超えた意欲を見せてくれた。

こうして「こどもが語る居場所のミリョク」という子どもが登壇するフォーラムの開催が決定した。

### 13. こどもが語るフォーラムの開催

我々は、市内にあるこども食堂や学習支援などの子どもの居場所を訪ね、児童館だけでなく、様々な居場所から登壇してくれる中高生を募った。「地域のおとなたちに、なぜ自分たちがこの場に通うのか、なぜ必要なのか、自分たちの言葉でぎっくばらんに語って欲しい」と呼びかけ、さらに、「みんなの生の声を聞かせて欲しいから、打ち合わせなしの『ガチ』でやろう!」ということ宣言してしまった。

フォーラムは2部構成とし、第1部は「居場所のミリョク」という高校生による基調スピーチ、第2部は、Aちゃん含め、市内の居場所を代表して集まった中高生によるステージ上の座談会とした。

マチデコ代表として登壇するAちゃんには、フォーラム主催者として第1部の司会もお願いした。地元の人たちに彼女の真の姿を見て貰いたい。そんな想いもあった。しかし、実際に彼女と会って打ち合わせができる日はかなり限られていた。そもそも、当日果たして本当に来てくれるのだろうかという不安もあった。さらに、他の登壇者も、プレッシャーを感じ登壇を渋っている、という情報も耳に入ってきていた。打合せがない“ガチ”座談会であったこともまた、ハードルをあげる要因になっていた。

一方でこのフォーラムは、地元の方だけでなく全市から問い合わせがあり、専門機関や地方議員からの参加表明が寄せられ、地元紙にも大きく取り上げられる等、我々が想定していた以

上に注目を浴びていた。初めて自分たちの手で開催するフォーラムということに加え、緊張する子どもたちの声をうまく引き出すことができるのか、何より、登壇する子どもたちは当日ちゃんと来るのか…。我々の不安と緊張は極限状態のまま、連日連夜スタッフで集まり、準備や打合せを重ねた。

### 14. 「ここに児童館をつくって館長になりたい」

フォーラム当日、司会の打ち合わせ時間より少し遅れてAちゃんが現れる。保護者と登壇をめぐって口論があったようだが、それを押して来てくれたAちゃんの姿を見たこの時点で、こみ上げるものがあった。

会場には想定以上の来場者があり、開幕からステージに立ち司会を予定しているAちゃんは、緊張で目に見えて震えていた。司会、座談会での登壇で、それぞれ彼女が慕うスタッフと並んで立つことになっていたため、直前までスタッフとの司会練習が続いていた。ファシリテーターとして登壇を予定していた私の緊張もピークであったが、Aちゃんを励ますのに必死で（お陰で）緊張を感じる余裕もなかった。

第1部の高校生による基調のスピーチから、圧倒的な説得力をもった子どもの生の声。居場所は出会いの場、居場所は体験の場、そして居場所には、魅力あるおとながいる、ということが、幼い頃から児童館に通う高校生により語られた。

第2部の座談会では、学習支援の場に通う中学生が「勉強はしていないが、この場所でいつか自分も役にたちたい」ことを、不登校を経験した高校生は「この居場所がなかったら今の自分はなかった」ことを語った。登壇を承諾したことを後悔し、一度は辞退したいと児童館で吐露していた男児は、元ヤンキーである児童厚生員への愛着を語り「ここは居心地がよい」と話した。そして、Aちゃんは、マチデコについて「本当はだれにも知られたくない場所」であることを聞き取れないほどの小さな声で語り、「こ

の地域に児童館をつくり、館長になりたい」と、決意を語ったのである。

会場は、拍手と感動に包まれ、壇上の私も涙を堪えるのに必死であった。これが、子どものころ、これが子どものことば、これが子どものちからであることを思い知らされ、どの子のことばも全身を駆け巡った。

終了後、舞台裏に下がった途端、スタッフに抱きついて来たAちゃんをみんな全身で抱きしめた。他の登壇児童も安堵と達成感に溢れた本当にいい顔をしていた。それぞれが、自分が通う居場所を愛し、誇りに思っていることが伝わる本当に良いフォーラムであった。Aちゃんの中学校の先生もAちゃんの姿を涙ぐみながら見守ってくれていた。

約70名の方から寄せられたアンケートには「子どもたちの声を聞け大変勉強になった。今後も気づいたことを教えて下さい。大人は子どもの事を分かったようで分かっていないので」「みなさん緊張もあったと思いますが、自分の思いを堂々と話している姿に感動しました。元ヤン君もえらい！」(すべて原文まま)という、大学生やおとなからの感想、登壇者への激励の他、「(中高生が) 考えたり、言葉に詰まったりしていたのが、真実味があった」という小学生の感想もあった。

登壇した中高生からも「緊張したけど、話すことができてよかった」「おとながみんな話をきいてくれた」と興奮冷めやらぬ感想を受けた。我々スタッフも、緊張と不安と期待から一気に解き放たれ、今までのどんな大変だった事業より、やりきった！という充足感に溢れた。私たちにも、地域に子どもの声を届ける橋渡しができた！子どもたちを信じて良かった！と心から思った瞬間であった。

このフォーラムは私たちの自信となり、翌年の、不登校をテーマにしたこども登壇の座談会第2弾の開催へと繋がった。

## 15. その後のAちゃん

## ～中学校卒業を迎えて

中3だったAちゃんは、フォーラム後、本格的に受験について考える時期となっていた。学校側は、Aちゃんへ、保護者へ、マチデコを通して、とさまざまな形でサポートし、まさに、学校と地域が一体となって彼女とその家庭を支えていた。私たちは、学校と繋がることで、こんなにもAちゃんの困りごとに対し直接的な関わりができるのかと、毎回目からうろこが落ちる思いで見守った。

卒業式には、校長先生から依頼を受けたT児童厚生員も地域の母親として出席し、Aちゃんは大好きな母親2人に見届けられ、無事に卒業証書を受け取った。

## 16. おわりに

現在、マチデコは月に1回開いていたイベント要素の強い事業を縮小し、平日の放課後時間帯に「放課後\*マチデコ」として月2回程開催している。当初、他児が来ることを拒絶していたAちゃんも、徐々に受け入れ、今では「ここには児童館がないけど、児童館みたいなことをしてもらって、みんなほんとに嬉しそうだね。」とまで言ってくれるようになった。数年前には想像もできなかった彼女の成長した姿をみることができるのは、長年にわたり子どもと関わるができる児童厚生員の特権であろう。Aちゃんにとっても、地域のおとなや関係機関が自分の味方であることを実感できるマチデコ存在は特別だということが、彼女の姿に溢れている。

当然ながら、児童館ではAちゃんのように成長を見せてくれる子ばかりではない。支援が届かなかった子、届いたかどうかさえもわからない子も多い。私たちの仕事は、成果が見えにくく、時にじくじたる思いも抱くが、Aちゃんのように信頼できるおとなに出会い、支えられた経験は、その子の人生を支える見えない根っこ部分を確実に育てていくものと確信している。

また、この実践では、学校との連携が大きな

要素としてあった。児童館で過ごす子どもたちを見てみると、学校や家庭と一線があるからこそ本来の姿を見せているのだと感じる。評価や利害関係のないところで紡いでいく子ども達との関係づくりは、鋭い感性と繊細さが求められ、手間も時間もかかるが、そうして築いた関係は強固だ。校長先生は、それを十分に理解、尊重した上で、学校とAちゃんとの間に児童館を位置づけ、そのお陰で児童館の特性が大いに発揮された。

このような「顔の見える関係」を地域で築いていくためには、私たち自身が児童館の役割や機能を発信し続けなければならないということも、改めて実感することとなった。

今回のフォーラムでは、居場所の意義、価値、可能性が子どもの言葉によって明らかになった。児童館が子どもや、子どもを育てる保護者の絶対的な味方となり、さらに、児童館が地域からも必要とされ、期待され、誇りにされるよう、子どもたちの声を地域にも届け、子どもたちの想いを具現化させていきたい。それが我々の使命である「子どもの最善の利益」の擁護につながると信じている。